The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ウィリアム・モリスのブックデザイン : モリス,リケッツ,アシュビーをめぐって
Author(s)	今井, 美樹
Citation	デザイン理論. 1993, 32, p. 94-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53023
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ウィリアム・モリスのブックデザイン
―モリス，リケッツ，アシュビーをめぐって―

今井美樹

Fig. 1

W. Morris, THE WOOD BEYOND THE WORLD (Kelmscott Press, 1894)

Fig. 2

W. Morris, SONNETS AND LYRICAL POEMS BY D. G. ROSSETI (Kelmscott Press, 1894)

Fig. 3

C. Ricketts, THE POEMS OF JOHN KEATS (Vale Press, 1898)

ウィリアム・モリスはブックデザインにおけるタイポグラフィーの原理の提唱を旗印にケルムスコット・プレス（1891－1898年）を設立したが，もうひとつの試みとして，中世写本及びインキュナブラに現われるイルミネーションの復活とその機能の再生を挙げることができる。彼は書籍紙面のあらゆるエレメントにイルミネーションを適用しており，特にフルボーダーと呼ばれるテキスト，タイトルの周辺を囲むそれはケルムスコット・プレスの特徴ともなっている。

イルミネーションのデザインには，壁紙，テキスタイルを始めとするモリスのパターンデザインの理論が応用されつつ，ブックデザインとしての機能が備わっている。つまり，紙面全体に目を行き渡らせ，且つ読書の妨げにならない構成である。彼はそれを，均一な描線，植物の茎の交差，葉脈や花弁の描写，黒い背景にしばしば現われる白い点描等で解消している。また，フルボーダーからハーフボーダーへ引き継がれ，イニシャルと融合し，更に装飾印版となってテキストへ落し込まれるイルミネーションから文字への流れは，彼のオーナメントがエディトリアルデザインとして機能していることを意味する。

モリスにとってのブックオーナメントは，各エレメントを繋ぎあわせ，尚且，テキストに節目，メリハリを付ける一エレメントである。彼は「タイポグラフィーだけで美しい」本が存在するといいながら，「装飾は活字自体と同じくらいページの一部をなすはずのものであり」「その本にふさわしい建築的な制約に従わなければならない」エレメントであると判断している。つまり，タイポグラフィーとイラストレーションに構造体を与えていく役目が，彼の言うブックオーナメントなのである。

ヴェール・プレス（1896－1903年）を主宰したチャールズ・リケッツのボーダーは，イルミネーションでありながら各々一冊の本のためにデザインされたオーナメントであり，書籍の内容やイメージに合わせたイラストレーション的エレメントであるといえる。リケッツにとっては，タイトルページは，その書籍一度きりのイラストレーションでありオーナメントであって，フォーマット化は余り意味がなく，その数も少ない。

彼は「印刷復興のねらい」とは「永久に信頼できる我々の文学の一部に，不変で美しい形を与えることにある」と述べており，彼が良いとした文学に，複合的な造形でアプローチする態度をとった。それぞれの文学の内容が異なれば，自ずと造形も違ったものになる。リケッツがイラストレーションの延長として，個々にオーナメントを展開していく方法をとったことがうなずける。

チャールズ・ロバート・アシュビーは，モリスのデザイン理論，材料，機械というハード，ソフト両面を引き継ぎエセック

ス・ハウス・プレス（1898－1910年）を設立した。

オーナメントは，イニシャルとイラストレーションに集約されているが，特に植物モチーフを使ったイニシャルのデザインは，アールヌーヴォーの持つ非対称的な有機曲線で描かれており，おしなべて抽象化されていてモチーフの意味そのものよりも形態の表現が前面に押し出されている。

アシュビーは，個々にエレメントが存在することに着目した。各々の役目を担うエレメントを総合的に構成し，造形することに意義を感じた彼にとっては，ブックデザインという行為そのものに意味を置いていたであろう。彼のオーナメントの捉え方は，リケッツのように複合的未分化状態でもなく，モリスのように構造体を与えるエレメントでもなく，構成要素の一部分，パーツのような役割を考えていたと言える。それぞれのパーツを構築する際に彼独自の形態を与えることでブックコンストラクションを完成させる，という方法である。このやり方だと，デザインテイストを変化させることで多くのバリエーションが得られる。事実，今日のブックデザインの方法論は，各々のパーツを時には幾何学的に，時には流麗に使い分けることによって成立している。

三者のデザインを比較すると，モリスが言うところの，美しくして読み易い書籍制作をスタートラインとしていながら，結果的には異なる表現となっている。それはタイポグラフィーもさることながら，オーナメントの扱いの違いが変化をもたらしている。

極端に言えばリケッツ，アシュビーの両者は，モリスのイルミネーションというオーナメントの在り方に，独自の解釈で解答したことになる。リケッツの場合は，イラストレーションとイルミネーションを兼ね備えた総合的な書籍制作への土壌を作り，大衆化していくグラフィックデザインに対し，ブックスビューティフルという挿絵装飾の豊富な文芸誌や絵本の世界を開拓していく。一方，アシュビーはアールヌーヴォーのムーヴメントと共に，合理的なオーナメントの処理方法や，タイポグラフィーの新しい様式でのデザインで，他のヨーロッパ諸国へとエディトリアルデザインを目覚めさせていく。

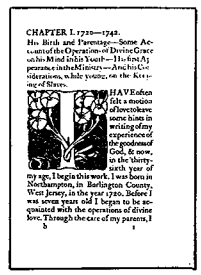
ケルムスコット・プレスに於ける印刷活動の意義は，タイポグラフィーの原理の提唱と後の商業印刷への発展にあるとされているが，モリスが多くを語らなかったオーナメントの機能に，実は，後のブックデザインを多彩に発展させる鍵があったのではないか。そして，モリスと，現代に続くマスメディアとしてのブックデザインとの発展段階に，リケッツやアシュビーの様なデザイナー達が存在し，独自の世界を展開させてきたことによって，エディトリアルデザインが徐々に移行してきた事も忘れてはならない。

いまい・みき　サントリー㈱
デザインミュージアム設立準備チーム
1993. 5 .15　第135回研究例会

Fig. 4

C. Ricketts,
THE TRAGICAL HISTORY OF DOCTOR FAUSTUS
(Vale Press, 1903)

Fig. 5



CHAPTER I. 1720—1742.
His Birth and Parentage—Some Account of the Operation of Divine Grace on his Mind in his Youth—His first Appearance in the Ministry—And his Considerations, while young, on the Keeping of Slaves.

I HAVE often felt a motion of love to leave some hints in writing of my experience of the goodness of God, & now, in the thirty-sixth year of my age, I begin this work. I was born in Northampton, in Burlington County, West Jersey, in the year 1720. Before I was seven years old I began to be acquainted with the operations of divine love. Through the care of my parents, I

C. R. Ashbee, A JOURNAL OF THE LIFE AND TRAVELS OF JOHN WOOLMAN IN THE SERVICE OF THE GOSPEL
(Essex House Press, 1901)

Fig. 6

C. R. Ashbee,
AN ENDEAVOUR TOWARDS THE TEACHING OF JOHN RUSKIN AND WILLIAM MORRIS
(Essex House Press, 1901)